台大日本語文研究第 17 期
2009 年 6 月，頁 49-84
2009-3-2 收稿，2009-6-19 通過刊登

有關「youda」・「rashii」之使用區別
—兼與「souda」之比較—

黃鴻信*

摘要

有關標題所列各語詞之使用區別自寺村（1979）發表以來，即引起相當熱烈的討論，不過迄今仍有言所未逮之處。在相關之諸多研究成果中，本研究承繼先行研究之成果，就中尤以野林（1999）和菊池（2000）爲中心，針對標題所列三語詞之語意內容加以探討、論述。

本研究之主要結果可以指出下列幾點：（1）「youda」係說話者或以自己之經驗、或以感覺、或以知識，要之，即是以個人之自我感受爲基礎來攝取事態，並下判斷時所使用，其判斷內容並非即指事態所顯現之事實，而僅止於接近事實；（2）「rashii」係在事態移轉變化的過程裏，說話者以其中所顯現的特徵或某些根據爲基礎，自各環節相互間之關連性，推演或導出某一另外之事態或結果時所使用。觀察或推演的過程係專以前後事態相互間之關連性爲主來展開的，其間說話者之經驗、感覺等容或亦產生其作用，但僅屬資助觀察或推演過程進行之一個助力，自結果而言，並不介在其中，無需特別予以突顯、討論，此點與前述（1）之語意特徵迥異，但所推演或導出之事態或結果是否爲真，則有待驗證，這點與前述（1）相同；（3）「souda」係將話題焦點至於事物，表示該事物所具有之性質近似於與用來形容該性質之某一特定語詞所含有之語意特徵時所使用；（4）影響標題各語詞相互間替換之因素有說話者之態度與來自談話流程之限制，後者之影響

* 台灣大學日本語文學系副教授

力較諸前者爲大。

關鍵詞：說話者之自我感受、事態間之關連性、事物之性質、說話者之態度、談話流程之限制

The study on the proper use of "youda" and "rashii" -the case of comparison with "souda"-

Huang, Hung-hsin*

Abstract

The study on the proper use of "rashii","youda" as well as "souda" has been widely investigated by various researchers since Teramura's (1979) first publication. Nevertheless, there are still some points need to be further clarified. The major purpose of this article is to rethink and discuss the semantic cores of "youda" and "rashii" based on the arguments of Nobayashi(1999) and Kikuchi(2000).The results of this study are as follows: if "youda" refers to the experience, feeling or knowledge of a speaker, then it means that "youda" can be used in a situation such as making judgment according to speaker's own intention. However, it does not necessarily mean that the judgment he made completely reflects the reality of a phenomenon, it merely approximates the reality.

While a characteristic has manifested itself in the shifting process of a phenomenon, "rashii" is used in such a situation where results have been observed. As for the process of observation or inference, it is extended based on the relation between phenomenons. A speaker's experience or feeling may be involved in the process, but as it is not especially noticed. As a result, it can be said that the intervention of a speaker can be ignored in this case.

"rashii" and "youda" differs in the way as indicated above, but they

* Associate Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

are common in one point that whether the observed phenomenon or result is true or not remains uncertain.

"souda" is used to show the semantic characteristics of certain expression that describe the properties of things. Speaker's attitude and the flow of speaking are the factors that influence the interchangeability of the group of"rashii","youda" and "souda".it seems that "souda" is more dominant than the former two.

Keywords: intention of a speaker, relation between phenomenon, properties of things, attitude of a speaker

「ようだ」・「らしい」の使い分けについて
―「そうだ」との比較をかねて―

黄鴻信*

要旨

表記各語の使い分けについて寺村（1979）が発表されて以来盛んに論議されてきているが、今でもなお言い尽くされていない憾みがある。本稿では先行研究の成果を踏まえながら、とりわけ野林(1999)と菊地（2000）を中心に表題の各語の意味内容について検討・論述することを目的とする。

主な結果として次のようなことを指摘することができる。(1)「ようだ」は話者が自己の経験なり感覚なり知識なり、いうなれば、自己の意思に基づき事象をとらえ、判断を下す場合に用いるが、判断内容は事象の現実そのものではなく、現実に近似しているものに止まるのである。(2)「らしい」は事象が移り変わる過程で顕現された特徴或いは何らかの根拠を基にして、その節々間の関わり合いから、ある別の事象または結果が観察される場合に用いる。観察または推定の過程において、専ら前後の事象間の関連性についての推定・観察が中心として展開されるのであり、話者の経験や感覚などが或いは働いていようが、とりわけ取り立てて問題視するほどのものではなく、結果的には介在していないと指摘することができる。この点は上記（1）の場合と異にしているが、観察された事象または結果は本当かどうかは分からないという点では両者が同断である。(3)「そうだ」は物事に焦点を当てて、当の物事の持っている性質がそれを形容するのに用いられる特定の言葉の含有する意味的特徴に近似し

* 台湾大学日本語文学系副教授

ているのを表すのに用いる。(4) 表記各語の互換性について影響を与える要因として話者の態度と談話の流れによる制約が挙げられるが、前者に比して後者の支配力がより大きいと見受けられる。

キーワード：話者の意思、事象間の関連性、物事の性質、話者の態度、談話の流れによる制約

「ようだ」・「らしい」の使い分けについて ―「そうだ」との比較をかねて―

黄鴻信

一、はじめに

「ようだ」と「らしい」の意味的相違について寺村（1979）が発表されて以来、盛んに議論されている。これと関連して、「そうだ」もその討論の一環として加わるようになった。今までこの三者それぞれの用いられ方の違いについての研究は夥しいが、論述と結果との間にずれがあり、従って、実際に用いるに際して必ずしもそれらの成果を利用して適切に判断できるものではないという難がある。言い換えれば、これまでの論説ではなお尽くされていないところがあると言わざるをえない。本稿では表記各語の中心的意味、つまり本質をつきとめ、その使い分けを問題にする。

「ようだ」と「らしい」にはそれぞれ複数の用法があるが、本稿では両者とも主にいわゆる「推量」の用法を中心に扱うことにし、その他の用法は必要に応じて触れるに止める。一方、「そうだ」には「様態」と「伝聞」という二通りの用法があるが、前述したように「推量」の用法を考察の的とする「ようだ」・「らしい」との関連という観点から主として「様態」を表す用法を扱うことを断っておく。

二、これまでの研究

寺村（1979）が「主観」・「客観」の観点で「ようだ」・「らしい」の用法の違いを弁別する論を打ち立ててから、現在に至るまで、この二つの表現の使い分けについての研究は盛んに行われてきた。時間の軸に沿って見れば、野林（1999）と菊地（2000）を境としてそれまでは話者と事態との心理的距離[1]や、判断の素材つまり情報の直

[1] 例えば柴田（1982）がそれに当たる。

接・間接の違い[2]や、判断に伴う責任の有無などのように、さまざまな観点からの論説が続出したが、それ以降は研究の動きがやや下火になってきたようである。また、それまでの主要な研究の類別や結果についての詳らかな検討も野林（1999）と菊地（2000）から鳥瞰・把握できる。従って、ここでは主として野林（1999）と菊地（2000）の論述について検討するが、その他の諸説は（3）以下の各節で必要に応じて触れることにする。

野林（1999 pp.57-61）は状況面、本質面、運用面から「ようだ」・「らしい」・「そうだ（伝聞）」の三形式の複雑に入り組んだ類義関係を考察した。その分析の中で、氏は状況面を五つの状況範疇に分け、そして場面における事態認識の有無、話者にとってその事態認識が自己の直接認識か自己の直接認識以外のものかに基づき、四つの基準を取り立てた上で、五つの状況範疇の連関の構成と四つの基準との関わり合いにより、本質面における三形式の基本的性格、即ち各形式それぞれの意味を析出した。結果として、「ようだ」は「話者の事態認識であることを有標的に示す形式」であるのに対して、「らしい」は「述べられる事態認識が話者にとって直接認識外のものであることを有標的に示す形式」であると指摘している。一見、両形式それぞれの内包する意味内容は截然として区別されているようであるが、ここでは次のような問題点を指摘することができる。氏の論述の中から話者の事態に対する認識には直接的認識と間接的認識があると読み取れる。「ようだ」は状況範疇Ⅰ（話者が自らの感覚によって直接とらえた事態の様子や印象が述べられるような場面）、つまり直接的認識と、状況範疇Ⅱ（いわゆる「推定」の意味合い―何らかの根拠に基づく事態の推論―が述べられるような場面）・状況範疇Ⅲ（いわゆる「伝聞」の意が述べられるような場面）、つまり間接的認識との両方に用いられる。一方、「らしい」は状況範疇Ⅱ・Ⅲとともに状況範疇Ⅳ、つまり「伝聞・他者判断」の状況にも用いられる。この両形式の用いられ方は状況範疇Ⅱ・Ⅲ、言い換えれば間接的認

[2] 例えば早津（1988）がそれに当たる。

識の場面において重なっていると見受けられる。同じ間接的認識とはいうものの、果たしてその意味内容も同様なものであると理解してよいのであろうか。この点については氏の論述の中で言及されていない。

菊地（2000 pp.47-48）では判断材料と判断内容を一体化して、ある対象の様子を述べるか、判断材料と判断内容の間に推論を介在させて対象の様子を述べるかにより、「ようだ」と「らしい」が使い分けられているととらえている。しかし、どのようにして「一体化」していると判断できるのか、また、どのようにして「推論」が働いていると把握できるのか、この点がまさに問題である。「あ、誰か来た〔ようだ / らしい〕」という文について、氏は次のように解釈している。

> たとえば話手が家の中の玄関のそばにいて、直感的に人の気配を感じた場合（特にそれを近くにいる聞手に伝える場合）はヨウダのほうが自然である。ラシイがなじむのは、たとえば玄関から離れたところでインターホンの音を聞いて推論したような場合である。もっとも、「インターホンの音から『誰か来た』と見てとるのは推論を加えるというほどのことでもなく、インターホンの音に密着して『誰か来た』という様子が見てとれる」と捉えれば、インターホンの場合でも、ヨウダも使える。（菊池 2000 pp.49）（下線筆者）

なぜ玄関から離れたところでなら、インターホンの音を聞いて「誰か来たらしい」と発言するためには推論を介在させなければならないのか。また、推論という作業過程はどのようになされるのか。一方、どのような状況ならインターホンの音に密着して『誰か来た』という様子が見てとれるのか。言い換えれば、判断材料と判断内容がずれているのか、密着しているのかをどのようにして見極めることができるのかについて論の中では提示されていない。氏は自ら「推論」を「≪観察された様子≫と≪それに密着して導かれるわけではない（それとは距離を置いた）判断内容≫とをつなぐ」と定義付け

ている。ここからは、上記の氏の解釈について、インターホンの音という判断材料から直接感覚的に「誰か来た」という判断内容をとらえることができない、つまり、だれかが来たのか、何かの原因でインターホンの音がしたのか、判別がつかないので、思索といった作業で判断材料と判断内容との間のずれを埋めて「だれか来たらしい」という結果にたどり着いたと理解できないわけでもない。しかし、このようでは、分析的且つ理論的で、実際の使用との間に乖離があると思われる。

なお、野林（1999 pp.59）では、状況範疇Ⅱの場合において、話者の事態認識は、「根拠」→推論→「判断内容」といった認識過程を経た論理的なものであると指摘しているのに対し、菊地（2000 pp.47）では、「ようだ」の使用には「推論」を加える余地がないと主張している。両者はこの点で異にしているが、推論という用語の意味合いに多少違いがあることによるものである。本稿においては後の分析に指摘するように、推論の有無は「ようだ」と「らしい」の違いを弁明するのに必ずしも働きを有していないので、両氏の視点の違いを指摘しておくことにとどめる。

三、「ようだ」の意味内容について

「ようだ」には比況、例示、不確かな断定などのように複数の用法がある。ここでは国立国語研究所による『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』(昭和 55 年 7 版 秀英出版 pp.275-278)に載っている各々の用法[3]からそれらの用法に一貫している意味特徴を探ってみる。

①ある事物が他の事物に似ているという意味を表わす。

○無邪気で快活で、フランス人形の***ように***可愛い。

○裏口の戸をガタガタと開け、三畳の襖をひらいて、飛び込む***ように***部屋へ入ってゆきました。

[3] ただし、本文に載っているゴシックのうちから用法に関しての部分のみを抽出するが、その他は省略することを断っておく。なお、各用法の用例もその一部であることを断っておく。

②内容を指示することを表わす。ある事物が他の事物に等しいという関係。

○以上の***ように***多くの課題があるが～。

○中共は対外貿易の再開を熱望しておりそれを促進する***ような***措置をとっている、～

③例示の意味を表わす。(ある事物が他の事物に関する一例であるような関係)

○「ワールド・シリーズの***ような***大事な試合になれば、三日目か五日目に出ますね」

○「電波探知機の***ような***のは使わないのですか？」

④不確かな、または円曲な断定の意味を表わす。

○「下痢もしないのに体重が増えぬ***ようでし***たら、それは食餌の量が不足しているのです」

○「何処かで君を見た***ようだ***な…」

①では話者は自己の感覚から話題の人物の容姿の可愛さを「フランスの人形」にたとえたり、相手が部屋へ入る様子を「飛びこむ」としてとらえている。②では「多くの課題」の指す具体的内容についてその一部または全部として話者は自己の判断からそれまでに取り上げたものの通りであることを示す。他方、中共が現時点でとっている措置に関して話者は自己の認識からそれは貿易の再開を促進するのに有効であると理解しているのである。このように、話者が自己の感覚なり、判断なり、認識なりから事態の有様をとらえる点が①と②に限らず、③と④の場合からも析出できるのである。

そのうち、とりわけ④の「何処かで君を見たようだな…」のようないわゆる「不確かな断定」の用法において、話者が自らの記憶や体験に基づいて述べる事態（ここでは「何処かで君を見た」）に対して、果たしてそうであったかどうか、はっきりと言い切ることができない、つまり、自分にも確信がないという側面が「ようだ」を通じて呈示されると思われる。これは、一見、他の諸用法と異なってはいるが、よく吟味すれば、結果的には同様、すなわち自己の感覚

に基づいての発言という点では他の場合と変わりがないと言えるのである。

「ようだ」の語源が物事の様子・模様を示す意の「よう」であり、物事への「描写性」が強いことは今や学会ではもはや定説となっている。「描写性」が強いことには、別の言い方をすれば、述べる事態は現実そのものにイコールするわけでなく、おおよそ現実そのものに近似しているという性質が内包されていると言い換えられる。①の「フランスの人形のように可愛い」を例にすれば、話題の人物の可愛さがフランス人形のそれと全く同様と言い切れるのではなく、それに近似していると現実から一歩下がって自己の感覚を言い表すのである。言うなれば、この中にも、はっきりと現実そのものの通りであると言い切ることができないという性質を暗に潜ませていると言えるのである。従って、表面に出ていようが、暗に潜んでいようが、上述した性質を同様に有していることは否めない事実なのである。次の例（1）がこの点を裏付ける。

（1）男はせせら笑うと、ソファの腕にジーパンの片足をぐいと上げた。「お兄さん、だめよ、そんな失礼なことを……」「失礼！？何が失礼なんだよう。お前に子をはらませてよう、後は知らん顔で逃げる男よりは、俺は失敬じゃねえよ。なあ、おやじさん」「いや、どうも、栄介がどうも申しわけのないことをしたようで」「申しわけのないことをしたようで？冗談じゃない！ようでじゃないよ、したんだよ、おやじさん」（三浦綾子『残像』）〈下線筆者 以下同〉

「ようだ」の派生した「（～）ように（…する）」のそれぞれの用いられ方にも上述した「ようだ」の特徴が見受けられる。ここでは『日本語文型辞典』（砂川有里子（代表）くろしお出版 1998 pp.621-623）に載っている「ように」の用法[4]を中心に両者の一致性を探ってみる。

（一）目的

[4] 書き抜き方は注 3 に同じ。

○後ろの席の人にも聞えるように大きな声で話した。

○忘れないようにメモしておこう。

（二）勧告

○忘れ物をしないようにしてください。

○時間内に終了するようお願いします。

（三）祈願

○早く全快なさいますよう、祈念いたしております。

○どうか合格できますように。

（四）後半に「言う」「伝える」などの伝達を表す動詞を伴い、要求内容を間接的に引用するのに使う。

○すぐ家に帰るように言われました。

○隣の人に、ステレオの音量を下げてもらうように頼んだ。

（五）行為や状況を成立させることを目指して努力する／心掛ける／配慮する、といった意味を表す。

○大きな活字を使い、老人にも読みやすいようにする。

○油ものは食べないようにしている。

（六）不可能な状態から可能の状態に、あるいは実行されない状態から実行される状態に変化することを表す。

○眼鏡を掛ければ、黒板の字が見えるようになります。

○隣の子供は最近きちんとあいさつするようになった。

（一）では話者が事態（「後ろの席の人にも聞えること」、「忘れないこと」）に関心を寄せてそれを実現させるために積極的にある事柄（「大きな声で話すこと」、「メモすること」）を行う。その中に話者の意思が介入していると見てとれる。このような事態への配慮や心掛けから当の事態の遂行を念願するといった話者の意思の介在が（二）～（五）の場合においても同様に指摘できる。（六）は話者の感覚から事態についての模様・様子を描写・叙述するものであるから、上記の「ようだ」の場合と同様な特徴を持っていると言える。

このように見てくると、事態へのとらえ方にせよ、事態の実現への期待にせよ、「ようだ」（派生形の「ように」を含めて）の使用に

は話者の意思が関与していることが分かった。話者が自己の知識なり感覚なり、言うなれば、自己の意思に基づき事態をとらえ、判断を下すが、判断内容は事象の現実そのものでなく、それに近似しているに止まっているというのが「ようだ」の中核的意味、つまり本質であると思われる[5]。

一方、野林（1999）では状況面を五つの状況範疇に分けているが、「ようだ」が使えるのは状況範疇Ⅰ～Ⅲ、即ち「様態」の状況、「推定」の状況、「伝聞・話者判断」の状況であると指摘している。次の例（2）・（3）、（4）・（5）、（6）・（7）はそれぞれ「様態」、「推定」、「伝聞・話者判断」の状況に当たるものである。

（2）夜ふけの裏通り。刃物を持ったやつに、若い女が脅されている。通りがかった男は、それを見てしまった。事態は切迫しているようだ。ほっておくわけにはいかない。といって、警察へ電話をしているひまもない。（星新一『ごたごた気流』）

（3）彼に最後に会ったという理由で僕は警察に呼ばれて事情聴取された。そんなそぶりはまったくありませんでした、いつもとまったく同じでした、と僕は取り調べの警官に言った。警官は僕に対してもキズキに対してもあまり良い印象を持たなかったようだった。高校の授業を抜けて玉撞きに行くような人間なら自殺したってそれほどの不思議はないと彼は思っているようだった。（村上春樹『ノルウェイの森（上）』）

（4）「もしかしたら…」ひとりがふるえ声で言った。「何を思いついた」「地球までついてくるつもりかもしれない。そして、

[5] 柴田（1982）の「話者との心理的距離が近い事態について、それが実現・実在する確実度を直接的な根拠にもとづいて判断・推定するときに用いる」や、氏の見解をさらに敷衍した早津（1988）の「ひきよせ」というのは話者と事態との間の心理的距離についてとらえるのであるのに対して、本稿ではそれをとらえられた事態と現実との間に若干隔たりがあるととらえており、上記両氏の説と異にしている。本稿の主張は菊池（2000）の「〈観察対象〉と〈判断内容〉が近いと捉えれば、ヨウダ」との指摘に似ているが、氏の距離の近い遠いという言い方は上記柴田らの説を受け継いでいるが、非常に漠然としており、当を得ていないと言わざるを得ない。

そこで爆発する。それが高性能の核爆弾だったら、地球上は全滅です」「そうとしたら、ことだ」その重大さに、誰もが気づいた。あの星でのことを思い出してみる。宇宙船をやっつけるつもりなら、容易にできたはずだ。それなのにやらず、帰還を許した。そして、そのあとをつける。少人数を殺すのではあきたらず、帰りついた星そのものを全滅させようというつもりのようだ。なんという恐ろしい計画。（星新一『ごたごた気流』）

(5) 学者は言う。〈…きのうの夜から、多くの人がずっと眠れなくなっている。それに関連があるようだ。現代の不安が高まったせいか、平穏が続きすぎたせいか、不眠の原因については、調査の上でないとなんともいえない。しかし、眠れないでいるのは現実だ。【略】〉（星新一『ごたごた気流』）

(6) 洋吉の父母にも、勝江の父母にも、粗暴な人間はいないはずだ。勝江の父は早くに死んでいて、洋吉は会ったことはない。しかし、勝江から聞いているその父は、寛容な男らしい性格であったようだ。母親は情の深い優しい人である。勝江はどうやら、親に似ぬ鬼子のようでもある。そしてさらに栄介のような鬼子を生んだことになるのか。（三浦綾子『残像』）

(7)「三つ子の魂百までという言葉ですね，あれはわたしも真理だと思いますよ。これが日本で意外と忘れられている。三歳までで人間を作るということ、これは決して過言ではない」「とすると、わたしなど三歳で作られちゃってるわけですね。あと、どうすればいいのかな」若い教師の言葉に、みんなが笑った。「いや、性格形成としては、三歳までの影響は実に大きいようですよ。たとえば、三輪車を親にねだって買ってもらうとすると、ねだれば買ってもらえるという体験をするわけですね。【略】この初体験が強烈

に脳に記憶されてしまうと、いわれています。【略】」（三浦綾子『残像』）

例（2）では、話者が自分の身の置かれた状況から咄嗟に事態の重大さを直感する場面である。例（3）では事情聴取をしている警官の言葉遣いや語気、表情、身振りなどといった言語・非言語行動から話者がその場で感じた警官の自分への取り扱い方についての評価である。野林（1999）では、例（2）・（3）ともに直接認識、感覚的であり、そこには推論という認識過程が含まれていないとされている。一方、例（4）では帰りついた星そのものを全滅させるという結論が得られるまでの背景に関しての描写があるから、何らかの根拠に基づいての推論という認識過程が含まれており、論理的とされている。例（5）においても例（4）の場合と同断である。ここからでもはっきりと分かるように、推論過程の有無は「ようだ」の意味内容の弁別に関わりあっていないと考えられる。一方、例（6）と（7）においてはそれぞれ「勝江から聞いている」、「～といわれています」という成分があるから、他者からの伝え聞きを述べるとされている。しかし、例えば例（3）において「警官の語気が荒いとか、顔に軽蔑の表情を浮かべていたといった描写がなされていれば、「ようだ」の用いられる状況範疇も異なってくる。また、例えば例（7）においては「…記憶されてしまうと、いわれています」の代わりに「…記憶されてしまうのです」で文を完了させてしまえば、文中の「性格形成としては、三歳までの影響は実に大きいようですよ」の「ようだ」についてどう判別すればよいのか、迷ってしまいかねない。従って、状況範疇というのは「ようだ」の用いられ方を把握するのに役立つが、「ようだ」の意味内容の理解には必ずしも有益とは思われまい。

例（2）・（3）の「様態」の用法は、話者が自分自身の感覚から事態をとらえて述べるものであるから、上記の「ようだ」の意味内容と一致しているが、例（4）～（7）の「推定」・「伝聞・話者判断」の場合についてはどう弁明すればよいかが問題の所在である。例（4）ではあの星での思わぬ経験から地球へ戻る途中までの種々の不思議

なハプニングを回想しつつ帰りついた星そのものを全滅させるという結果に辿り着くというのはすべて話者が自己の体験や認識に基づいて事態をめぐって分析・理解したものであり、結果がどうかはともかくとして、自分としてはそう判断したのである。これは上記の「ようだ」の本質に合致しているので、「ようだ」が用いられたのである。例（7）では「あれはわたしも真理だと思います」というところから、話者が「三つ子の魂百まで」ということわざの意味するところを確信していることが分かる。従って、「性格形成としては、三歳までの影響は実に大きいようですよ」と云々するのも、話者が自分の認知から述べたものであると考えられる一方、どの程度まで影響を与えるかははっきりと言い切れないところもあるので、「ようだ」が付けられたのである。例（5）と（6）もこれと同様な分析の過程を辿れば、解釈がつくのである。

次の例（8）・（9）・（10）はいずれも、その中からは上述した直接認識とか、根拠とか、伝聞といった要素を見分ける難があるものである。しかし、作者が自らの観点や認識から世間の種々様々な事象をとらえて批評しているからこそ、「ようだ」が用いられるのであると見受けられる。言い換えれば、次に掲げるような例からも本稿の論述の有効性が裏付けられるのである。

（8）雨に限らず、「足が速い」は変化の激しいことで、“このちくわは足が速い”といえば、腐るのが早いことである。だから、別に雨の一筋一筋が足に見えなくても、ただ雨が移動していくのを「雨足が速い」と言うことができる。もっとも、ビルに囲まれた都会では、その移動がなかなか実感できないので、この言葉もわかりにくくなっているようだ。（柴田武『知ってるようで知らない日本語』）

（9）山っ気とは、山師の気質ということである。こうした人は、洋の東西を問わず、混乱の時代ほど多いようで、現代は「山っ気の明日」人が増えているように見える。（同上）

（10）今では、人情の機微にうとかったり、風流を解さない人

を「野暮」と言うが、昔の遊里にしても、ただただ金にあかせて余裕のない遊び方をする男は、嫌われたようである。（同上）

四、「らしい」の意味内容について

「らしい」には接尾辞と助動詞との二通りの用法がある。まず、接尾辞としての用法について触れてみる。次に掲げる（11）・（12）はその用例である。

（11）昔、ある市役所で、「市民の苦情や要望にすぐ対応する」というモットーのセクションを作った。その名は＜すぐやる課＞。―お役所らしからぬネーミングと発想で大いに話題になった。（赤川次郎『試写室 25 時』）

（12）網棚に読み捨てた新聞を拾って読む人を、そうまでしなくても、という目で見ていた。拾と捨という字をよく間違える癖に、拾うより捨てる方を一段上と思っていた。しかし、マットレスをかついで帰り、鼻をつまんで再び戻しに来た人を考えると、この方が人間らしいなという気がして来た。（向田邦子『無名仮名人名簿』）

例(11)では苦情などを訴えたらすぐに対処してくれるという点は、役人風を吹かせ、単純明快に市民の所望にかなうように作為することは万に一つもないという役所に対する社会一般の暗黙の了解とは異なる。(12) では他人の捨てたものであっても、役に立てさえすれば拾って使ってかまわないし、自分にとって不要のものになっても、何らかの役に立つこともあるから、他人の利用に提供する、言うなれば、資源を最善に利用するのは人間として然るべきである。これは、『新明解国語辞典第五版』(pp.1458)（金田一京助ら 鴻儒堂 民国 87 年）における「…といわれるだけの諸条件を十分に備えている様子だ」という接尾辞としての「らしい」についての解釈に合致している。ここでは、物事にはそういわれるだけの条件を十分に備えているというのは、裏を返せば、社会通念とか、経験といった一般

的認知から事象にはそのような性質が含まれていると理解されるのであり、話者が自らの意思や認識に基づいて事象について判断を下すのではない、という点が注意されたい。

次に、助動詞としての「らしい」に関して、前掲国立国語研究所の『現代語の助詞・助動詞―用法と実例―』(昭和 55 年 7 版 秀英出版 pp.278-280)に載っている用法[6]からその意味特徴について探ってみる。

①推定または円曲な断定の意味を表わす。

○丁度ここで前の列車に故障があったらしく、列車は徐行をはじめました。

○「よく降るね。」と、壮夫さんはいつでもいう。東京の人だから、雪があまりすきでないらしい。

②ある事物が、いかにもそのものにふさわしい様子をしている、または、何かにきわめて似ている、という意味を表わす。

○「まったく、君らしくもなく、変てこなキンキラ声を出してゐるゾであやふく、お見それ申すところだったよ」

○「そういうところは、いかにも苦労人らしい。」

②の用法は上記接尾辞の場合に当たるので、さておくが、①に焦点を絞って見ることにする。自分の乗っている列車がおもむろに走行するのに様々な原因が考えられるが、話者としては自己の経験とか、車内アナウンスといった根拠に基づき、それが前の列車の故障と関連があることに察しがつく。一方、成長の環境と、雪が降り続くことに対して「よく降るね」と常々無愛想げにぐちをこぼすことから、相手が雪になじまないことが推察される。この用法では、事象が移り変わる過程で顕現された特徴或いは何らかの根拠を基にして、その節々間の関わり合いからある事象または結果が観察される。すなわち、ここでは、専ら前後の事象相互間の関連性について語るものであり、話者が自分の認識や意思から事象をとらえて自己の判断内容を述べるのではないという特徴を押えることができるのである。

[6] 書き抜き方は注 3 に同じ。

このように見てくると、接尾辞として用いられる場合においても、助動詞として用いられる場合においても、「らしい」の意味特徴として、まず、話者の意思や感覚などが事象間の関連性についての観察や推定の過程においてその一環として働いてはいるにしても、特に問題として取り立てて論議するものではなく、結果的には介在していないという点を立てることができることが分かる。これは次に示す例（13）、（14）、（15）からいっそう裏付けられる。

（13）若い男は【略】受話器をとった。耳をすませときおり小さくうなずいた。卓上カレンダーに目をやって鉛筆でしるしをつけ、受話器を机の表面に近づけ、ドアをノックするように机を二度こんこんと叩いた。二十秒かそこらの短い電話だったが、彼は一言も口をきかなかった。この男は僕をこの部屋に入れてからただの一度も音声を発していない。口がきけないのだろうか。でも電話のベルに応えて受話器を取り、相手の話を聞いているところを見ると、耳は聞えるらしい。（村上春樹『ねじまき鳥クロニクル第 3 部鳥刺し男編』）

（14）女は微かな衣擦れの音を立てながら部屋を横切ってやってきて、ソファーの僕の右隣に静かに腰をおろした。そのひっそりとした座り方で、小柄な体重の軽い女性であるらしいことがわかった。（同上）

（15）やがて男は鞄の中から黒っぽい布に包まれたものをそっととりだした。男の手付きからすると、それはやわらかくてぐにゃりとしているらしかった。（同上）

（13）では若い男が電話のベルに応えることや、その電話での応対の様子などから、口のきくきかないはともかくとして、耳は聞えるということが観察される。男の振る舞いをめぐって話題が展開される場面であり、話者が事象をとらえて自己の判断を主張するものではないゆえ、そこには話者が特に自己の感覚や判断を割り込ませることを要としないと思われる。（14）と（15）においても同様に解釈

できる。

さて、上に指摘した「事象が移り変わる過程で顕現された特徴或いは何らかの根拠を基にして、その節々間の関わり合いからある事象または結果が観察される」という点について更に敷衍して述べる。次に示す例（16)、(17)、(18）を見てみる。

（16）片岡は、疲れて、老けて見えた。「本当なら、お前にこんなことを頼むべきじゃないんだ」「どうかしたんですか」【略】「知子」と、片岡は言った。「女房を知ってるな」「淑子さんですね」「うん。―どうやら、あれに男がいるらしい。お前にそれが事実かどうか、探ってほしいんだ」【略】「でもどうやって…」「淑子は、いつも日曜日、絵の仲間と会って、展覧会を見に行く。その帰り、たいてい、その仲間と夕食をとって帰ってくるんだが、たぶん、一人で先に帰ると言って別れ、男と会ってる」（赤川次郎『のろいの花園』）

（17）「【略】小父さまね、山畑君ってご存知でしょう？」【略】「ああ、いつかあなたが追い払ってくださった…。あの男が、どうかしたの」「警察にあげられたらしいわ」「警察へ？」「ええ、恐喝らしいの。新聞沙汰にならないようにって、わたしの知っている記者のところに、親が頼みに来たんですって」【略】山畑なら警察にあげられても、何の不思議もないと、洋吉は思った。その洋吉の表情を見て摩理がいった。「小父さま。山畑君と栄介さんは仲がよろしいそうよ。新聞記者のところに、栄介の名まえもいっているらしいわ」（三浦綾子『残像』）

（18）「でも、親に似ぬ鬼子というのもあるわね」【略】「そうだね。突然変異は人間にあるかもしれないのね」「ほんとうね。どんな子が自分たちに生まれてくるか、わからないのね」「しかし、その親の子ではあるんだよ。弘子はカインって知ってるかい」「カイン？カインの末裔という小説

があったけど、よくわからないわ」「カインはアダムとイブの長男さ。そして、人類最初の殺人者だよ。弟のアベルを殺したんだが、アベルはいい性格だったらしいよ」（同上）

例（16）では「淑子は、いつも日曜日、絵の仲間と会って、展覧会を見に行く。その帰り、たいてい、その仲間と夕食をとって帰ってくる」という節は事象の背景であるが、この背景を基にして、「たぶん、一人で先に帰ると言って別れ、男と会ってる」という推論を経て、「あれに男がいるらしい」という結果に辿り着くのである。話題は妻の淑子の普段の慣習的行動をめぐって繰り広げられるものであり、その中に推量の節も含まれているが、話者が事象の節々相互間の絡み合いをめぐって分析する過程でその一環としてなされる推測に過ぎず、話題の中心は事象そのものにあると読み取れる。人妻でありながら、そういった疑わしい行動があることから、男ができているという結果に結びつくのは、強ち自分自身の特別の認知からでなくとも、社会一般の常識からすれば、ありきたりの連想であると考えられる。(17) はいわゆる伝え聞きの例であるが、文中で他者の語ったことをそのまま引用するに当たって、「新聞沙汰にならないようにって」、「親が頼みに来たんですって」、「山畑君と栄介さんは仲がよろしいそうよ」のように「らしい」の代わりに「って」、「そう（だ）」の表現形式が用いられていると見受けられる。ここからは、「らしい」にはいわゆる伝聞を表す働きがあるかいなかは疑問に思われると言わざるをえない。文中・文末の「恐喝らしい」や「警察にあげられたらしい」や「栄介の名まえもいっているらしい」などの「らしい」が「恐喝だって」・「恐喝だそうだ」のように、「って」や「そうだ」に置き換えられても文として不自然ではないし、摩理の語ったところはすべて知り合いの新聞記者から伝え聞いたものであるので、この場合の「らしい」は伝聞または伝聞の意に近いとす

る説もある[7]。しかし、よく吟味すれば、「らしい」による表現と、「って」や「そうだ」による表現とはニュアンス，厳密に言えば、意味内容が異なることに気づく。「天気予報では、あしたは雨が降るらしい」を例にすると、あしたの天気に関する情報を総合的に考え合わせた上で、雨が降るという結果が推定され、そして推定された結果を述べるのに「らしい」を用いて表現するのである。従って、「らしい」と、「って」や「そうだ」との意味的違いは、事象をめぐっての情報からその結果が観察されるか、他者からの伝え聞きをそのまま伝達するかにあることが分かる。ここから見ると、(17) における「恐喝らしい」や「警察にあげられたらしい」や「栄介の名まえもいっているらしい」なども、話者が他者から聞いた一部始終を総合的に整理し、そこから観察されたところを述べるのであると考えられる。(18) では「アベルはいい性格だったらしい」が推察された根拠は何らかの作品であるという点で (17) の場合と異なっているが、作品中の描写、つまりアベルという人物をめぐっての情報からその性格が観察されるというところは (17) と同断である。

以上検証してみたところをまとめてみると、「らしい」はある事象をめぐっての節々間の関わり合いを根拠にして、ある別の事象または結果が観察・推定され、その観察・推定された事象または結果を述べるのに用いられると指摘することができる。これが「らしい」の意味内容である。その特徴として、観察または推定の過程において、専ら前後の事象間の関連性についての推定・観察が中心として展開されるのであり、その結果には話者の意思や感覚が介在していないと指摘することができる[8]。

なお、「ある事象をめぐっての節々間の関わり合いを基にして」と

[7] 例えば野林 (1999) では「らしい」が使われる状況範疇Ⅲと状況範疇Ⅳはそれぞれ「他者からの伝え聞きによるもの」と「他者がそう認識しているという述べ方」と指摘している。この点は本稿の分析結果と異なっている。

[8] 柴田 (1982) では「らしい」は「話者との心理的距離が遠い事態について、それが実現・実在する確実度を間接的な根拠にもとづいて判断するときに用いる」との説や、氏の見解をさらに敷衍した早津 (1988) の「ひきはなし」というのは話者と事態との間の心理的距離についてとらえるものであり、本稿の主張と異にしている。心理的距離の遠近云々についての批判は注 1 の場合と同断。

いう点に関して、ここでも上記「ようだ」の場合同様、顕在している場合もあれば、潜在している場合もある。これは上に掲げた諸々の例からでも分かるが、証拠補強のために、次のような例を挙げておく。(19) から (20) へとその顕在性が薄れつつ、(21) では潜在してしまうと見受けられる。事象をめぐっての情報が顕在している場合は問題がないが、それが潜在している場合でも、本稿の立場からすれば、「らしい」によって示された内容は観察とか、伝え聞きとかといった根拠に基づいての推定・観察作業を経て導き出されるものと把握することができるのである。

(19) “彼のことなんか目じゃないよ”“それはどういうことだ”“まったく問題にしないということだ”“彼にも誠意はあるように思うんだが”キャンパスの片隅で、二人の学生がこんなやりとりをしていた。どうやら、何かの催しの運営のことで、一人の男を問題にしているらしい。(柴田武『知ってるようで知らない日本語』)

(20) ここのところ、知り合いの中小企業の社長の顔色がさえない。どうやらサラ金に手を出して、首が回らないらしい。こんなとき、「四苦八苦」の状態だ。(同上)

(21) 今の子供はナイフで鉛筆が削れないらしい。(同上)

五、「そうだ」の意味内容について

「そうだ」の用法については菊地 (2000 pp.55) では

(ⅰ) 話手 (疑問文なら聞手) が、ある＜可能世界＞を思い描いて述べる。(ⅱ) ＜現実＞がそのような＜可能世界＞を思い描かせるような性質をもっている。

という両条件をともに満たす場合に使うと指摘した上で、更に＜可能世界＞ (pp.55-56) に関して具体的に①＜まだ現実となっていない次の局面＞、②＜自分が直接経験していない場面＞、③＜自分が直接経験していない感情・感覚＞、④＜やがて確認が得られたとした場合、その局面＞、⑤＜仮想世界＞などの諸ケースがあると説い

ている。次に挙げる（22）～（26）は上記①～⑤のそれぞれに当たる。

（22）洋吉の前に来て、弘子はチェアーに腰をおろした。弘子は洋吉にちょっとほほ笑みかけながら、土鍋の蓋をとった。ほうほうと白い湯気が上り、卵を落したおじやの香りが漂った。「うまそうだな」（三浦綾子『残像』）

（23）有名な話だが、ある高校の入試問題で“○肉○食”に漢字を入れさせたところ、「焼肉定食」と書かれた答案が何枚かあったという。この例でいくと、「けんぺいづく」の漢字を書かせたら、「憲兵」と書く答案が出てきそうだ。（柴田武『知ってるようで知らない日本語』）

（24）僕は一度そこに呼ばれて昼ごはんを食べさせてもらったが、陽あたりの良い綺麗なアパートで、緑も小林書店にいるときよりはそこでの生活の方がずっと楽しそうだった。（村上春樹『ノルウェイの森（下）』）

（25）青年は立ちどまった。あわててはいけない。急いで逃げたりすると、怪しまれるだけだ。落ち着いて、なにか話しかければいいのだ。ここでなら、いかに育ちのよさを感じさせるといった会話が、自分にもできそうな気がした。（星新一『ごたごた気流』）

（26）耕介や愛子が良一に好意を持っている様子が、奈緒美にはうれしくないはずはない。それにもかかわらず、奈緒美は耕介や愛子のように良一をほめる側に立つことはできなかった。良一と輝子、良一の母と輝子の父、そう思っただけで、奈緒美は嘔吐しそうになる。浅ましいと思う。（三浦綾子『ひつじが丘』）

まず、その＜可能世界＞という具体的な場面の適否について検討してみる。（22）は現実という点から見れば、話者がまだ食べていない、言うなれば、未経験のゆえ、確実に①に当たるが、一方、やがて食べてみてうまいということを確認しうるから、④にも当たると

思われる。(25) も同様に解釈されうるし、(23) は②に当てはまるのみでなく、①ないし④の要素も含まれていると考えられる。(24) は他者の感情・感覚を傍から感受するものであり、自分が直接経験していないと言える一方、(26) は比喩的表現であるので、それぞれ③と⑤に当てはまる。このように見てくると、見方によって解釈のされようも異なってくることが分かる。また、一見、以上検討したところのいずれにしても、氏の説く範疇内のものに引っ括られていると見られるが、しかし次に示す (27)、(28)、(29) はいずれも性質的に氏の指摘したものと違っていると思われる。

(27)「なんだ、みんな起きてたのか！」オーバーを着たまま、のっそり入ってきた栄介は、大きなあくびをした。【略】「超勤かね」機嫌をとるような洋吉の語調だった。「まあ、そんなところです。弘子、敦夫茶をくれ。今夜は零下十二、三度にはなりそうだな」栄介はオーバーも脱がず、傍らの椅子に腰をかけた。(三浦綾子『残像』)

(28)「私は、こういうところｔｔきらいじゃないの。暗いところで怖がるだろうと思って、部長先生が私をここへ閉じ込めたのなら、間違いね」ひとみがしゃべり続けている間に、ペンライトを取り出した絢子は、実験室の中を調べて回った。—あった！いかにも素人の考えそうな所に、二つ、隠しマイクを見つけた。(赤川次郎『試写室 25 時』)

(29) 我家で時計といえるのは目覚時計ぐらいだが、買う時にはずいぶんあちこちの店を探し、ベルの音を何回も聞いてこれに決めた。リーンと可愛らしい音で鳴るのもあったが、デパートの館内放送のアナウンス嬢の、やや人工的な作り声みたいで、これはやめにした。かといって情け容赦なく、噛みつくように、わめくタイプも、使っているうちに小面憎くなりそうである。(向田邦子『無名仮名人名簿』)

(27) では気温がどうなっているか分からないが、「零下十二、三度

になりそうだ」という発言は今まで肌で覚えた経験に基づいてなされたのであると思われる。(28) は素人であるからこそ、そう考えるという一般論である。一方、(29) は話者自身の感情・感覚について言うものである。これは、氏の指摘した＜可能世界＞の具体的ケースは「そうだ」の用いられうるそれの一部に含まれていることを物語っていると思われる。逆に言えば、、話手がある＜可能世界＞を思い描いて述べる云々というのは、必ずしも「そうだ」の意味内容を把握するためには、役立つ面もあるものの、まっとうなものではないと受け止められるのである。

次に、氏の説いた（ⅱ）、つまり、＜現実＞がそう思い描かせるに足る性質を備えているという点について検討してみる。(22) では土鍋の蓋を取るとともに、ほうほうと白い湯気が上り、卵を落したおじやの香りが漂った。そこへ「うまそうだな」という嘆声が発せられた。香りが漂っていることにより、おじやには「うまい」という言葉の意味内容に近接する特徴があり、しかし実際にはうまいのかどうか分からないので、それに「そうだ」をつけて「うまそうだ」と述べるのである。言い換えれば、「うまそうだ」はおじやの持っている性質について述べるものであり、「そうだ」はおじやが「うまい」の中核的な意味に近接する特徴があることをマークするものであると考えられる。(23) では「〇肉〇食」に漢字を入れさせたところ、「焼肉定食」と書かれた答案が何枚かあったことから、「けんぺいづく」を書かせたら、「憲兵」と書く答案が出てくる可能性も十分にあると想像される。話題の中心は事象そのもの自体にあり、そのような答案が出てくるかどうか分からないが、可能性が十分にあるというのは「出てくる」という断定的状況に接近しているという性質を持っていると受け止められるのである。従って、そのような性質を示すのに「そうだ」をつけて「出てきそうだ」と述べるのであると思われる。(24) では、陽あたりの良い綺麗なアパートという生活環境から言えば、書籍や家財道具などのぎっしり詰め込まれた書店での生活に比べては楽しいと常識的に考えられるし、話者自身も一度

呼ばれてそこで食事をさせてもらったことがあるから、相手の生活ぶりを見て楽しいというイメージを受ける。しかし、その楽しいというのは他者の感覚・感情であり、自分の直接経験しているものではなく、あながち表裏一体と言い切れない面もあるゆえ、「楽しい」の意味内容との乖離を「そうだ」でマークし、「楽しそうだった」と表現するのである。その他（25）以下の諸用例も上述したような分析作業を行えば、同様な解釈に辿り着く。このように見てくると、「そうだ」はあくまでも事象に焦点を当てて叙述するものであり、当の事象の持っている性質がそれを形容するのに用いられる特定の言葉の含有する意味的特徴に近似しているのをマークするのに用いられるのであることが分かる[9]。これは菊地（2000）の（ⅱ）と内容的にほぼ一致していると読み取れるが、氏の場合は（ⅱ）に（ⅰ）を合わせて見るべく、屈折した解釈であるのに比べて、本稿の立場はシンプルで分かりやすいと思われる。

六、「ようだ」・「らしい」・「そうだ」の置き換えについて

上記三、四、五の各節において「ようだ」・「らしい」・「そうだ」の意味内容について吟味し、表記各語相互間における明確な意味的相違を究明した。相互間に意味的に明確な相違があるということ自体はそれぞれに犯されべからざる各自の縄張りがあることを物語っている。しかし、次に挙げる例（30）～（32）のように下線の引かれたところを≪≫内のいずれの表現に置き換えても特に差し支えない場面も見受けられる。この節では表記各語の使用に影響を与える要因について探ってみる。

（30）学者は言う。＜……きのうの夜から、多くの人がずっと眠れなくなっ　ている。それに関連があるようだ≪あるらしい/ありそうだ≫。現代の不安が高まったせいか、平

[9] 中村（2000）では「知覚した事態の捉え方」として「そうだ」は「前接する事態が可能性としてありうるものとして捉えている」と述べているが、談話の場面において話者が中心となり、自らの知覚に基づいてある事態をとらえ、判断すると誤解を招きかねない、という嫌いがある。

穏がつづきすぎたせいか、不眠の原因については、調査の上でないとなんともいえない。しかし、眠れないでいるのは現実だ。【略】＞（星新一『ごたごた気流』）（≪≫内は筆者、以下同）

（31）装置はある銀行でのさわぎも教えてくれた。コンピューターが故障し、預金の払い戻しに手おくれがあった。それが何人かつづき、お客たちはいらいらしはじめる。そのうちデマが流れた。「あの銀行には現金の用意がないらしい≪ないようだ／なさそうだ≫」「たぶん、不良貸付けをして、こげついたのだろう」「早く行かないと、預金がおろせなくなってしまうぞ」人数はしだいにふえ、デマはひろがり、大混乱となった。（同上）

（32）会社の帰りがけに、青年はその弁護士の事務所へ寄ってみた。あるビルのなかの一室で、かなり景気がよさそうだった≪よいようだった/よいらしかった≫。助手らしいのを二人ほどおいていた。お客も多かった。しかし、別に急ぐことでもないので、青年は待つことにした。（同上）

学者というのは自己の専門領域に属する事柄について見解を求められた場合、自らの学識を基に所見を語るのが一般的である一方、知識に頼っての見解が直ちに現実そのものに繋がっているとは限らない場合もしばしばある。これはまさに「ようだ」の意味特徴に合致している。従って、例（30）では、まず「それに関連があるようだ」の使用が認められる。しかし、もし学者が自分の有している専門知識を働かせずに、単純に「人々が眠れないでいる」現実をめぐっての諸々の事象間の関連性に注目し、そこから分析作業を経てある結果または事象が導かれた場合ならば、「それに関連があるらしい」が成り立つ。また、もし専ら「人々が眠れないでいる」現実を引き起こした要因に話題の中心を絞るならば、「人々が眠れないでいる」原因と「それ」との関連が拭いきれず、両者間の繋がりが「ある」という範疇内に属すると考えられる場合には「それに関連があ

りそうだ」も成立する。言い換えれば、ある場面において「ようだ」・「らしい」・「そうだ」ともにその使用が認められる場合、いずれを用いるかは話者の態度によって異なってくると見受けられるのである。この点は例（31）・（32）からも裏付けられる。

一方、上に述べた話者の態度により「ようだ」・「らしい」・「そうだ」の選択が違ってくる場合と打って変わって、次に挙げる例（33）～（38）における下線の描かれた「ようだ」・「らしい」・「そうだ」が相互に置き換えられない場合もある。

（33）少し大きくなり、長女の私だけが、朝のおみおつけに、ほんの少し、七色とんがらしをかけてもいいと言われた時は、一人前として認められたようで、ひどく嬉しかった。（向田邦子『無名仮名人名簿』）

（34）「天網恢恢疎にして漏らさず」という。老子のおことばで、天の法律は広大で目が粗いようだが、悪人は漏らさずこれを捕える、という意味だということを、たしか女学校のとき習ったようだが、どうも私はこの天の網にすぐ引っかかるように出来ているらしい。就職をして、最初の締切、残業のときに、私は編集長に嘘を言って早く帰った。【略】私はその晩、男友達に芝居に誘われていた。どうしてもゆきたくて、新入社員の分際で怠けたのである。ところが、芝居が終ってあかりがついたら、すぐ横に、社長が坐っていた。（同上）

（35）綿谷先生はこの記事を読んで、その屋敷が岡田さんの住んでいる家のすぐ近所であることにふと気づかれたんですね。そしてひょっとしてその屋敷と岡田さんとのあいだに何かの関係があるんじゃないかって、だんだんひっかかってきたわけです。だからちょいとその辺のことを調べてみた【略】するとですね、【略】毎日岡田さんは裏の通路を使ってあの屋敷に通っているらしいということがわかった。どうも岡田さんはあの屋敷で行われている

ことにどっぷりと関係しているらしい。いやいやわたしも驚きましたよ。(村上春樹『ねじまき鳥第3部鳥刺し男編』)

(36) ナツメグは息子を何人かの耳鼻咽喉科の専門医のところに連れていった。しかし原因はやはりわからなかった。わかったのは、それが肉体的な欠陥なり疾患なりによるものではないらしいということだけだった。(同上)

(37) ここを出よう、と僕は思う。【略】ただここを出てみても、どこへ行くという当てもない。アパートに戻ることは危険だし、他に泊めてもらえそうな知り合いがいるわけでもない。いったい今夜はどこで寝ればいいのか。(三田誠広『僕って何』)

(38) 男は謝礼を置いて帰っていった。その後、この占い師は電話をかける。「適当な人物がみつかった。うまく仕事をやってくれそうだ。名前はだな……」なんと、この占い師、某国の秘密情報機関とも契約していた。よさそうな人物を選び出して連絡をすると、リベートがもらえる。(星新一『ごたごた気流』)

(33) では「一人前として認められた」というのは「七色とんがらしをかけてもいい」と言われた時、作者が内心そう感じたものであり、つまり、作者の直感によるものである。(34) では「天網恢恢疎にして漏らさず」という老子の言葉を自分としては女学校の時に習ったと覚えているがという意味合いから、これは作者自身の内省によるものであることが分かる。このような自己の感覚に基づいて事象の模様・様子について述べるという特徴は「らしい」にも「そうだ」にも備わっていないものであるので、置き換えがきかないのである。一方、(34) では自分が嘘をついて勤務をさぼって芝居を見に行ったが、思いがけなく社長がすぐ傍に座っていたことから、自分も「この天の網にすぐ引っかかるように出来ている」ことが推察される。(35) では調査を通して「相手が裏の通路を使ってあの屋敷に

通っている」ことや、「あの屋敷で行われていることにどっぷりと関係している」ことなどが導き出される。そして（36）では専門医の語ったところから、「それが肉体的な欠陥なり疾患なりによるものではない」ことが観察される。このように一連の事象が移り変わる流れからある事象または結果が析出されるという特徴は「らしい」の本領であり、「ようだ」・「そうだ」はそれにはなじまない。また、(37)と（38）はそれぞれ、日頃の付き合いから「泊めてもらえる」という性質を備えていると思われる友人と、仕事をうまくやってくれるという条件に符合していると思われる相手のことについて述べるものであり、つまり物事の性質について語るものと言い換えられる。物事の持っている性質がそれを形容するのに用いられるある特定の言葉の意味内容に近似しているというのは「そうだ」の縄張りであり、「ようだ」・「らしい」はその埒外にある。このように見てくると、談話の流れにおいて、「ようだ」・「らしい」・「そうだ」のいずれを用いるべきかは場面による制限も働いていると見受けられる。

以上、「ようだ」・「らしい」・「そうだ」三者間の互換性について検討してみたが、その互換が許されるかいなかに影響を与える要因として話者の態度と場面の制約が挙げられることが分かった。しかし、上述した例（30）～（32）の置き換えがきくの場合において、置き換えられた≪≫内の言い回しと原文を比較してみると、≪≫内の言い回しの方が多少とも落ち着きが悪いか不自然という感じがしないわけでもない。つまり、論理的に置き換えても差し支えないと思われる場合でも、談話の流れからそれに最もふさわしいものが選ばれるので、強いて置き換えると却って談話の自然さが削がれたり、談話の焦点がずれたりしかねない。これは、いうなれば、場面による制約が話者の態度に比して表題の各語の選択により密着している、言い換えれば、支配力がより大きいことを物語っていると思われる。

七、まとめ

以上、表記の各語の意味内容の特徴について論述してみた。その

主な結果をまとめると、次のようなことを挙げることができる。(1)「ようだ」は話者が自己の知識なり感覚なり判断なり、言うなれば、自己の意思に基づき事象をとらえ判断を下す場合に用いるが、判断内容は事象の現実そのものではなく、現実に近似しているに止まっているのである。(2)「らしい」は事象が移り変わる過程で顕現された特徴或いは何らかの根拠を基にして、その節々間の関わり合いから、ある別の事象または結果が観察される場合に用いる。その特徴として、観察または推定の過程において、専ら前後の事象間の関連性についての推定・観察が中心として展開されるのであり、話者の知識なり感覚なりが或いは働いていようが、とりわけ取り立てて問題視するほどのものではなく、結果的には介在していないと指摘することができる。ここは上記（1）の場合と異にしているが、観察された事象または結果は本当かどうかは分からないという点では両者が同断である。(3)「そうだ」は物事に焦点を当てて、当の物事の持っている性質がそれを形容するのに用いられる特定の言葉の含有する意味的特徴に近似しているのを表すのに用いる。（4）表記各語の互換性について影響を与える要因は話者の態度と談話の流れによる制約が挙げられるが、前者に比して後者の支配力がより大きいと見受けられる。

本稿では「ようだ」・「らしい」・「そうだ」を取り立ててその意味内容の違いについて分析を行ったが、同じ推量の意を表す「だろう」が「ようだ」・「らしい」とどのような意味的異同を呈しているか。また、文中において少しく触れたが、伝聞を表す「そうだ」が「らしい」との間の使い分けについても更に詳らかな検討を行う必要がある。併せて今後の課題としたい。

引用・用例の出典：

赤川次郎（1998）『試写室 25 時』集英社
赤川次郎（1998）『のろいの花園』集英社
金田一京助ら（1998）『新明解国語辞典』鴻儒堂

国立国語研究所（1980）『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』秀英出版
星新一（1979）『ごたごた気流』講談社
柴田武（2002）『知ってるようで知らない日本語』PHP 文庫
砂川有里子（代表）（1998）『日本語文型辞典』くろしお出版
三浦綾子（1990）『残像』集英社
三浦綾子（2004）『ひつじが丘』講談社
三田誠広（1982）『僕って何』河出書房新社
向田邦子（2003）『無名仮名人名簿』文春文庫
村上春樹（2007）『ねじまき鳥クロニクル第 3 部鳥刺し男編』新潮文庫
村上春樹（1992）『ノルウェイの森（下）』講談社

参考文献：

大場美穂子（1999）「いわゆる様態の助動詞「そうだ」の意味と用法」『東京大学留学生センター紀要 第 9 号』
紙谷栄治（2006）「様態を表す「そうな」から「ようだ」への推移」『関西大学文学論集』第 55 巻第 4 号　関西大学文学会
菊池康人（2000）「「ようだ」と「らしい」—「そうだ」「だろう」との比較を含めて—」『国語学』第 51 巻 1 号
金東郁（1992）「モダリティという観点から見た「ようだ」と「らしい」の違い」『日本語と日本文学』17 筑波大学国語国文学会
小島聡子（1996）「「らしい」について」『山口明穂教授還暦記念国語学論集』明治書院
品川恭子（1997）「「らしい」と「ようだ」—客観性・主観性の観点から—」『関西大学留学生別科 日本語教育論集』第 7 号
柴田武（1982）「ヨウダ・ラシイ・ダロウ」国広哲弥編『ことばの意味 3』平凡社
田野村忠温（1992）「現代語における予想の「そうだ」の意味について—「ようだ」との対比を含めて—」『国語語彙史の研究 12』和

泉書院
寺村秀夫（1979）「ムードの形式と意味（1）―概言的報道の表現―」『文芸言語研究（言語篇）第 5 巻』筑波大学文芸・言語学系
寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
佟華（1999）「状況判断の二形式―「ようだ」と「らしい」の使い分け」『日本言語文化研究』1
中村亘（2000）「「ようだ」「らしい」「そうだ」をめぐって―事態の捉え方の違いという視点から―」『早稲田日本語研究 第 8 号』（早稲田大学国語学会）
野林靖彦（1999）「類義のモダリティ形式「ヨウダ」「ラシイ」「ソウダ」―三水準にわたる重層的考察―」『国語学』197 集
早津恵美子（1988）「「らしい」と「ようだ」」『日本語学 7』 明治書院
龐黔林（2004）「モダリティ形式としての「そうだ」について」『神戸女子大学論集』
福島悦子（1990）「「ようだ」と「らしい」の意味・用法分析―形態・共起する語と意味・用法とのかかわりをめぐって―」『埼玉大学紀要』26
益岡隆志（2002）「判断のモダリティ―現実と非現実の対立―」『日本語学』二月号明治書院